

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（B）（海外学術調査）

研究期間：2007～2010

課題番号：19401030

研究課題名（和文） 東北アジアにおける定着的食料採集社会の形成および変容過程の研究

研究課題名（英文） A Study on the Formation and Transformation Process of Sedentary Food Gathering Society in Northeast Asia

研究代表者

大貫 静夫 (ONUKI SHIZUO)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号：70169184

研究成果の概要（和文）：

アムール川下流域においてロシア人研究者と共に国際共同発掘調査を実施した。その結果、層位と放射性炭素年代測定によりアムール川下流域における新石器時代の編年(コンドン文化→マルィシェヴォ文化→ヴォズネセノフカ文化)を確立することが出来た。そして、コンドン文化の文化内容を明らかにすることが出来た。これらの成果によりアムール川下流域における新石器時代の文化変遷をより具体的に捉えられるようになった。新石器時代における東シベリア地域との交渉関係も明らかにすることが出来た。

研究成果の概要（英文）：

We carried out the international joint excavation in the Lower Amur with the Russian Archaeologist As a result, we could establish the periodization of the Neolithic age(Kondon →Mal'shevo→Voznesenovka culture) in the Lower Amur based on the stratigraphy and C14 dating. And we clarified the material assemblage of Kondon culture. By these results we can catch now more concretely the cultural change of the Neolithic period in the Lower Amur. We also clarified more concretely the relationship between the Lower Amur and East Siberia.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2008年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2009年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2010年度	3,100,000	930,000	4,030,000
総計	12,700,000	3,810,000	16,510,000

研究分野：人文学 A

科研費の分科・細目：考古学

キーワード：考古学、ロシア極東、アムール川下流域、食料採集社会、新石器時代

1. 研究開始当初の背景

新石器時代のシベリアと環日本海地域では同じく食料採集民が先史社会を形成していたが、両者の大きな違いは、環日本海地域での定着的な生活に認められる。それに適応したのが堅穴住居であった。このように、更新世から完新世への環境変動の中で成立した東アジアの新石器時代の新たな枠組みとし

て、独自に「極東」を設定し、とくに環日本海大陸側に展開した、平底の深鉢を特徴とする新石器諸文化の土器を「極東平底土器」と呼ぶことにした。それとの比較によって縄文文化を位置づける作業は、『東北アジアの考古学』の中でまとめている。そこでも触れたが、縄文文化の解明には、同時代の環日本海地域の大陸側に広がっていた極東平底土器

社会の研究がきわめて重要なのである。

極東平底土器社会の中で、中国内モンゴル、遼寧省に広がる地域は、連続弧線文土器に代表される地域であるが、この地域の新石器時代の実態は最近の中国側の調査でかなり分かるようになってきた。それに比べると、現在はロシアに属する極東平底土器社会の東部地域の先史社会の解明は遅れていると言わざるを得ない。

極東東部を流れる大河であるアムール川は先史社会あるいは民族誌時代のいわゆる山丹交易においても、サハリンを経由して日本列島北部とつながることもあり、環日本海のネットワークを考えるとときには、この大河が大陸側のもっとも重要な幹線となる。

このことを明らかにするために、民族考古学的手法による先史社会の解明が必要だと考えた。そこで、平成 9～11 年度（大貫、佐藤は分担者として参加）、そして平成 13～15 年度に科研費（代表者は大貫静夫）をえて、ロシア極東のアムール川下流域及び沿海州地域において、日露の民族学者、建築学者、考古学者が共同で学際的な民族考古学的調査を続けてきた。それらの成果をまとめたものとしては、大貫・佐藤編『ロシア極東の民族考古学』などがあり、生業形態と居住形態の相関について、実際の資料にもとづいた居住形態モデルを構築した。

2. 研究の目的

今回の研究課題では、応募者らが今まで進めてきた以上のような調査研究の成果を背景に、ふたたび考古学のフィールドに回帰し、さらなる研究の深化を目指したものである。以下にその主な目的をかかげる。

1) 極東平底土器今回の研究課題の対象としているアムール川下流域は、極東平底土器の一角を占めており重要な地域であるが、いまだ研究の遅れた地域でもある。日本の縄文時代に対応する、アムール川下流域の新石器時代は、その最も基本となる編年すら不明確である。アムール川下流域ではオクラドニコフによるアムール編年がよく知られていた。すなわち、古い方から、マルイシェヴォ文化→コンドン文化→ヴォズネセノフカ文化である。ヴォズネセノフカ遺跡での層位的な所見に基づくものとされ、東部地域の信頼できる年代的枠組みとして長らく利用されてきた。

しかし、調査例が蓄積されるにつれ、もっとも古く位置付けることに疑問が生じるようになっていた。ヴォズネセノフカ遺跡の層位的所見というのも報告を丁寧に読めば、マルイシェヴォ文化とコンドン文化の関係は不明瞭であり、何れもヴォズネセノフカ文化よりも古いと言えるだけであることに気づき、大貫は 1992 年にはそれまで一般にコン

ドン文化より古いとされていたマルイシェヴォ文化を不分明なものとして扱わず、コンドン文化に代表されるアムール編目文土器を持つ文化とヴォズネセノフカ文化とをそれぞれアムール川下流域の新石器時代前半期と後半期のものとした。そして、98 年には型式学的な根拠から少なくともマルイシェヴォ文化の一部はコンドン文化に後続するものであるとした。我々のロシア側の共同研究者であるシェフカムードは 03 年にさらにはっきりとコンドン文化がマルイシェヴォ文化に先行することを明らかにしている。まずは、アムール川下流域の新石器時代の編年的枠組みを修正、確定することが大きな課題となっていたので、これをまず解決することが今回の研究課題で最初に取り組むべきものであった。

2) アムール川下流域には、時にシベリア地域のより北方の文化が波及することは以前から知られていた。マヤガバ遺跡でもヤクーチアの新石器時代中期文化であるベリカチ文化の土器が見つかったという簡単な報告がすでにある。また、紀元前 1 千年紀にもシベリア系と見られる尖底土器がアムール川下流域で見つかっている。そのような動きがあった背景にはアムール川最下流域が極東の針広混交林からシベリアの針葉樹林帯への移行帯となっているという生態的な背景があることは容易に想像される。アムール川の最下流域が極東地域と東シベリア地域の接点であるという視点から東シベリア系の文化がアムール川下流域でどのような動きをしたのかを具体的な発掘資料をもとに把握することを目指す。

3) 従来、我が国における大陸との間の北回りの交流論では間宮海峡を挟むサハリン北部やアムール川最下流域についてのこのような特異な地域性がまったく考慮されることなく、異なる生態系を超えてアムール川下流域から北サハリンを経由する環日本海の北回りルートが常につながっていたかのような議論がしばしばおこなわれてきた。縄文時代では早期の石刃鍬石器群が北海道東部に広がる時期にこのルートが重要な役割を果たしたことは間違いのないだろうが、その後の縄文時代にはそのような大きな役割を果たした痕跡はない。この間宮海峡を挟んだ極東の北縁地域が再び重要な役割を果たすようになるのはこの地域の生態系への適応としての海獣猟が盛んになる段階からであり、それが北海道東部にまで広がるオホーツク文化の形成のプロセスであろう。環日本海の交渉ルートとしては朝鮮・対馬海峡を経由する南回りのルートはしばしば重要な役割を果たしたことはよく知られているが、北回り

ルートはかなり異なる動きをしていたのである。縄文時代早期にサハリンを経由する北回りのルートが大きく開いた時期があることは明らかであるが、その実態を解明する必要がある。

3. 研究の方法

以上のような課題を解明するために、共同調査の対象として選ばれたのが、アムール川下流域でも河口部に近いマラヤガバニ遺跡と下流域でもっとも上流に位置するハバロフスク近郊のクニヤゼボルコンスコエ1遺跡である。

マラヤガバニ遺跡は多層遺跡であることから土器の編年の枠組みを作るに適した遺跡であり、またヤクーチア系の土器を出すというアムール川最下流部の地域性を知る上で重要と考えたからである。

クニヤゼボルコンスコエ1遺跡は従来調査が不十分で、石刃鏃など石刃石器群を伴うと言われてきたがその文化内容が明らかでなかったコンドン文化の単純遺跡であり、伴出する石器組成を明らかにする上で重要と考えたからである。また、最下流部のマラヤガバニ遺跡とは同じアムール川下流域とは言いながら距離は非常に離れており、相互の比較から地域性を確認することも北回りルートを考える上で重要であると考えたからである。

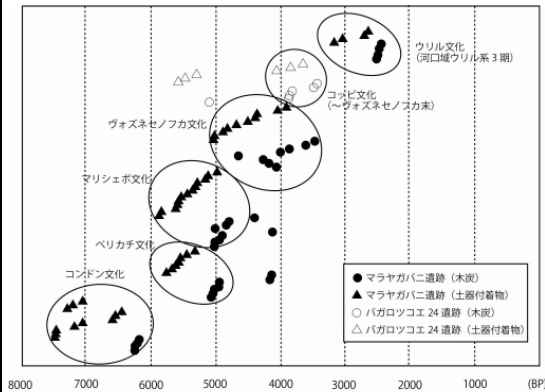
これらの発掘調査及び整理作業の過程で多数の放射性炭素測定年代のための試料を採取し、測定する。試料の所属する層位が明確なものを選び、土器に付着する炭化物を資料とすることで、考古学者が考える層位や土器の年代とのクロスチェックを行い、編年をより確実なものとする。このために年代測定を専門とする研究者が調査に参加する。



4. 研究成果

アムール川下流域においてロシア人研究

者と共に二カ所の集落遺跡で国際共同発掘調査を実施した。その結果、出土層位と放射性炭素年代測定により、従来問題の多かったアムール川下流域における新石器時代の編年



新石器～初期鉄器時代における各文化の¹⁴C年代値 (國木田ほか 2010)

(コンドン→マルイシェヴォ文化→ヴォズネセノフカ文化) を確立することが出来た。これらの諸文化は土器型式からみた場合さらにそれぞれ数段階に細別可能であり、アムール川下流域に於ける新石器時代の変遷はかなり明瞭になったと言えよう。ただし、コンドン文化と土器出現期のオシポフカ文化の間はいまだ不明瞭である。そして、ヴォズネセノフカ文化以後、古金属器時代への移行過程も不明瞭である。ただし、それぞれの過程が不明瞭なこと自体が歴史的な実態の反映であろうと考えるべきである。

そして、石刃鏃を伴うことで知られるコンドン文化はこれまでまとまった調査資料が少なかったため実態がよく分かっていなかったが、こんかいの調査によりその内容を明らかにすることが出来た。そして、本遺跡のコンドン文化の石刃鏃は年代測定でも極東地域の中でも古い段階のものであることが明らかとなったことから、大陸においても石刃鏃の存続時間が長いことがより明らかとなった。縄文時代早期の北海道東部に一時的に石刃鏃石器群が広がる段階が知られているが、大陸に於ける石刃鏃の存続期間の中では古い方に相当するクニヤゼボルコンスコエ1遺跡の資料はその年代とも近く北海道の石刃鏃石器群の出現を考える上で重要な資料を得ることが出来た。

これらの成果によりアムール川下流域における新石器時代の文化変遷をより具体的に捉えられるようになったことは今後、環日本海の北回りルートを考える際の重要な基礎となる。今後に残されている課題はこの石刃鏃の古段階に相当する段階がアムール川河口域ではどのようなものであったかである。

また、マラヤガバニ遺跡では以前から東シベリア地域のベリカチ文化の土器が出るということが知られていたが、今回の我々の調査でそ

れがマルイシェヴォ文化段階に伴うことが確定した。また、より河口に近い遺跡から東シベリア地域のより古い段階の新石器文化の土器が出ていることが我々の資料調査で明らかとなった。おそらく年代的にはコンドン文化の段階に相当するのであろう。

これらのことから、アムール川下流域の中でも河口部に近い地域は特別の動きをしていることが明らかとなってきた。

古代に於いてシベリア、極東という文化系統がアムール川河口域で交錯していたことが、日本列島、とくに北日本の先史時代の動向に大きな影響を与えたのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ①大貫静夫、サケ・マスと堅果類—『縄文式階層化社会論』を読む、異貌、査読無し、27号、2010、2—42
- ②福田正宏、アムール河口域の考古学と日本列島北辺域の先史文化、北方博物館交流、査読無し、21号、2010、10-14
- ③福田正宏、特集北東アジアと日本列島—新石器、考古学ジャーナル、No. 605、査読無し、2010、10-13
- ④福田正宏、東北アジア新石器的世界の構造変動—極東ロシアと日本列島の比較文化論—、季刊東北学、査読無し、19号、2009、103—123
- ⑤佐藤宏之、東アジアにおける前期旧石器時代から後期旧石器時代開始期までの研究の現状と展望—東アジア世界の成立と展開—、九州旧石器、査読無し、13号、2009、1-7
- ⑥福田正宏、北方の考古学—アムール下流域と北海道の関連性について—、季刊東北学、査読無し、15号、2008、111—127

[学会発表] (計7件)

- ①福田正宏、アムール河口域の考古学的調査(2010年度)、第12回北アジア調査研究報告会要旨集、28—31、2011年3月6日、札幌学院大学
- ②国木田大、ロシア・アムール流域における過去一万年間の文化編年、日本文化財科学会第27回大会研究発表要旨集、276—277、2010年6月26日、関西大学
- ③大貫静夫、コンドン文化の理解に向けて—クニャーゼ・ヴォルコンスコエ1遺跡の調査から—、日本考古学協会第76回総会研究発表要旨、18—19、2010年5月23日、国土舘大学
- ④大貫静夫、2009年度クニャーゼ・ヴォルコンスコエ1遺跡の調査について、第11回北アジア調査研究報告会要旨集、21—24、2010

年3月14日、東京大学

- ⑤国木田大、マラヤ・ガバニ遺跡の年代評価(2007年度)、第9回北アジア調査研究報告会要旨集、34—37、2008年3月16日、北海道大学
- ⑥福田正宏、東シベリアとアムール下流域との先史狩猟採集民間にみられる交渉関係史の解明、日本考古学協会第74回総会研究発表要旨、100—101、2008年5月25日、東海大学
- ⑦福田正宏、マラヤ・ガバニ遺跡における考古学的調査(2007年度)、第9回北アジア調査研究報告会要旨集、30—33、2008年3月16日、北海道大学

[図書] (計4件)

- ①大貫静夫、同成社、大・小興安嶺狩猟民の居住形態について、比較考古学の地平、2010、833—842
- ②大貫静夫、同成社、縄文文化と東北アジア、縄文時代の考古学1、2010、141—153
- ③大貫静夫、同成社、北東アジア新石器社会の多様性、東北アジアの歴史と文化、2010、71—86
- ④佐藤宏之編、同成社、縄文化の構造変動、2008、210

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大貫 静夫 (ONUKI SHIZUO)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：70169184

(2) 研究分担者

佐藤 宏之 (SATO HIROYUKI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：50292743

(H19→H20～H22：連携研究者)

熊木 俊朗 (KUMAKI TOSHIKI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授
研究者番号：20282543

(H19→H20～H22：連携研究者)

辻 誠一郎 (TUJI SEIICHIRO)

東京大学・大学院新領域創成科学研究科・教授
研究者番号：2013718

(H19→H20～H21：連携研究者)

高橋 健 (TAKAHASHI KEN)

東京大学・大学院人文社会系研究科・助教
研究者番号：20451776

(H19→H20～H21：連携研究者)

(3) 連携研究者

福田 正宏 (FUKUDA MASAHIRO)

東北芸術工科大学・芸術学部・講師

研究者番号：20431877

(H20～H22)

吉田 邦夫 (YOSHIDA KUNIO)

東京大学・総合研究博物館・准教授

研究者番号：10272527

(H21～H22)

国木田 大 (KUNIKITA DAI)

東京大学・大学院人文社会系研究科・助教

研究者番号：00549561

(H22)